

7月の栽培管理

リンゴ

○生育状況

6月15日現在の果実肥大は、‘つがる’、‘王林’で平年より大きく、‘ふじ’は平年並に推移している（表1）。

表1 県南部のリンゴの肥大状況（果樹試験場：横手市 令和4年6月15日現在）

品 種	調査項目	計測値			対 比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
つがる	果重(g)	25.5	21.9	22.2	116	115
	縦径(cm)	3.53	3.35	3.33	105	106
	横径(cm)	3.74	3.55	3.63	105	103
王 林	果重(g)	25.0	21.3	18.0	117	139
	縦径(cm)	3.96	3.83	3.56	103	111
	横径(cm)	3.50	3.31	3.20	106	109
ふ じ	果重(g)	17.4	17.7	18.0	98	97
	縦径(cm)	3.17	3.25	3.20	98	99
	横径(cm)	3.26	3.25	3.31	100	98

1 見直し摘果

摘果が遅れると翌年の花芽形成や樹勢へ悪影響がでるので、仕上げ摘果が終わっていない場合は早急に作業を行い、着果負担を軽減する。

見直し摘果では、着果位置や間隔(20cm程度)を考慮に入れながら作業を進める。小玉や果形不良、病虫害被害果などの品質不良果を取り除くほか、20cm以上の長い枝の果実、枝擦れする果実など、高い商品性が期待できない果実は摘果する。樹勢の弱い木や日当たりの悪い枝は強めに摘果し、樹勢の強い木や日当たり条件の良い枝ではやや多めに着果させるなど、樹勢に応じた着果管理を行う。

なお、品種別の着果基準は表のとおりで、残す果実の周辺に必要な葉数が確保されているか意識して作業を進める。

表 品種別着果基準

3~4頂芽に1果		4~5頂芽に1果	
つがる	王林	ふじ	さんさ
千秋	秋田紅あかり	シナスイート	シナゴールド
秋田紅ほっぺ	紅玉	ジョナゴールド	陽光
シナレッド		きおう	

2 樹体管理

(1) 新梢の剪去、誘引

苗木では主幹延長枝と競合する強い新梢を剪去するほか、側枝候補となる新梢が強くなるように誘引する。

(2) 徒長枝の管理

樹勢の強い木では徒長枝が繁茂し、樹冠内部への光や薬剤の透過性が悪くなることから、摘果作業が終了した頃を目安に早めに徒長枝を剪去する。

主枝の基部や主枝から側枝が分岐する部分の徒長枝は丁寧に剪去する。ただし、

過度に剪去すると、主枝等骨格枝の背面に日焼けを起こしたり、二次伸長を誘発する恐れがある。適当な間隔で弱めのものを残し、剪去しすぎないように注意する。なお、徒長枝を剪去するときは、基部を残さずきれいに切り、再発生を抑える。

(3) 支柱立て、枝吊り

開心形樹では、側枝が下がり樹冠内部に光が到達しなくなるところに支柱を入れて持ち上げる。わい性台樹等主幹形樹の下部の側枝は、果実の肥大とともに下垂して枝が折損したり、地面に接したりすることがある。このような側枝は早めにひもでつり上げ、適当な位置に保持する。

ブドウ

○生育状況

6月の気温は低く推移したが満開期は平年並みとなった。6月15日現在の生育は、ほぼ平年並みで、花穂は長い傾向にある。

表 ブドウの生育状況 (果樹試験場：横手市 令和4年6月15日現在)

品 種	調査項目	計 測 値			対 比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
キャンベル・アーリー	新梢長(cm)	81.6	130.4	136.5	63	60
	展葉数(枚)	10.9	12.8	12.3	85	88
	花穂長(cm)	15.6	14.6	14.3	107	109
巨 峰 (無核)	新梢長(cm)	106.9	111.3	117.3	96	91
	展葉数(枚)	12.3	12.2	12.6	101	98
	花穂長(cm)	24.0	20.1	23.4	119	102
シャインマスカット	新梢長(cm)	110.0	98.2	103.7	112	106
	展葉数(枚)	9.8	10.2	10.0	96	98
	花穂長(cm)	23.7	23.6	24.3	101	98

1 中粒品種の摘粒と着果量

「キャンベル・アーリー」、「スチューベン」は目標果房重を300g程度とし、着粒数はそれぞれ60粒、65粒程度を目安とする。

摘粒は果房を縦方向に1～2列(2列の場合は果房の表面と裏面各1列)果粒を外し、溝が埋まりやすいように果房全体を軽くひねる。

着房数は強めの新梢では2房、中庸～弱めの新梢(80～150cm)では1房とする。ごく弱い新梢には着房させない。最終的な着房数は「キャンベル・アーリー」で1m²あたり8～9房、「スチューベン」で1m²あたり6～7房に調整する。

2 大粒品種の摘粒と着果量

大粒品種の摘粒は、外に張り出した大きな果粒を除去し、果房最上部は穂軸を覆うように上向きの果粒を残す。房肩から房尻に向かっては着粒数が少なくなるように調整し、

収穫ときれいな円筒形になるように仕上げる。

(1) 無核栽培

①「巨峰」、「ピオーネ」および赤系大粒品種

目標果房重は400～450g。着粒数は「巨峰」で32～36粒、「ピオーネ」および赤系大粒品種で30粒程度を目安とする。「巨峰」の摘粒は、果房上部から1支梗あたり4粒で3段、次に3粒で3段、2粒で6段、1粒で3段を目安に調整する。

②「シャインマスカット」

目標果房重は600～700gで着粒数は45粒程度。700gを超える大房は目標糖度18%に達しない場合が多いので、着粒数を多くしない。主穂が二股や帯状の果房は、果粒が小さいうちに余分な支梗や果粒を摘除することで房型が整いやすい(図1)。

いずれの品種とも摘粒作業は7月中を目途に終了する。最終的な着房数は、1m²あたり2～3房(10aあたり2,500房)に調整する。



図1 「シャインマスカット」の摘粒前後の果房

図2 縮果症の果粒

(2) 有核栽培

「巨峰」、「安芸クイーン」などは満開15日後には有核果粒(長楕円)と無核果粒(小さな正円)の見分けがつくので、無核果粒を除去する。着粒数は無核栽培での目安を参考にし、摘粒作業は7月15日を目途に終わらせる。

無核果粒の混入が多い場合は、満開15～20日後にフルメット液剤(5～10ppm)に果房を浸漬し、果粒肥大を促す。

目標果房重を350～400gの場合、最終的な着房数は1m²あたり3房(10aあたり3,000房)に調整する。

30cm以下の弱めの新梢では良果は得られないため、早めに摘房する。摘房は着粒数が少ないバラ房、形状が劣る房などを対象に行う。

3 袋かけ

摘粒後、袋かけは薬剤散布後速やかに行う。また、大粒品種では、縮果症(図2)が発生する場合があるのでよく観察し、障害果粒を摘粒してから袋かけを行う。

4 新梢管理

棚面が暗い園地では、果実品質の低下、枝の登熟不足を招き、薬剤の透過性も悪いため病害虫が発生しやすくなる。このため、棚下に木漏れ日が入る程度に新梢や副梢を整理する。

モモ

○生育状況

6月15日現在の果実肥大は平年並みとなった（表1）。硬核期の開始時期は、「あかつき」、「川中島白桃」ともほぼ平年並みで、終了も平年並みと予想される（表2）。

表1 果実肥大状況（果樹試験場：横手市 令和4年6月15日現在）

品種	調査項目	計測値			対比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
あかつき	縦径(cm)	4.02	3.86	3.91	104	103
	横径(cm)	3.77	3.71	3.88	102	97
	側径(cm)	3.34	3.26	3.50	102	95
川中島白桃	縦径(cm)	3.85	3.81	3.86	101	100
	横径(cm)	3.58	3.64	3.73	98	96
	側径(cm)	3.09	3.08	3.18	100	97

表2 硬核期（果樹試験場：横手市 令和4年6月24日現在）

品種	硬核期始め	硬核指数3 ^{注2)} 到達予想
あかつき	6/18 (-1) ^{注1)}	7/6頃
川中島白桃	6/22 (±0)	7/9頃

注1) () 内は平年差

注2) 硬核指数は硬核期の進行程度を表し、指数0.5で硬核期の開始、指数4で硬核期の終了を示す。硬核期の終盤である指数3を越えてから、新梢管理や摘果をする。

1 修正摘果

修正摘果は樹上で選果するつもりで硬核期終了の少し前（硬核指数3以後）の7月10日頃から実施する。

着果過多を修正するとともに、果形不良果、発育不良果、病虫被害果などを確実に摘果する。

また、褐色斑点症状（図）は、リンゴうどんこ病菌によるもので、「あかつき」や「黄貴妃」で発生が多い。収穫期には外観上目立たなくなる場合があるが、サビとして残る場合があるため、症状がひどい果実を優先して摘果する。



図 褐色斑点症状

2 新梢管理

モモは頂部優勢性が崩れやすく、容易に樹形が乱れやすいので、新梢管理を徹底する。

定植当年は、第1主枝候補枝より下の主幹部から発出した枝は基部から剪去する。主枝延長枝の勢力を維持するために主枝延長枝と競合する強い枝は基部葉を残して剪去する。側枝候補枝は強くなならないように水平近くまで誘引する。定植2年目以降も定植当年同様に管理し、骨格枝の形成に努める。

成木では、過繁茂となっている主枝や垂主枝などの背面の徒長枝の摘心や剪除を行い受光態勢を改善する。ただし、日焼けや樹勢衰弱を招かないよう、取り過ぎに注意する。

3. せん孔細菌病の耕種的防除（春型枝病斑の除去）

せん孔細菌病は薬剤のみで防除することは難しいため、積極的に耕種的防除を組み合わせ対応する。

春型枝病斑は、開花期頃から2年枝に紫褐色～紫黒色の病斑が確認できる。枝病斑は5月をピークとして7月まで感染が続くほか、果実や葉への伝染源となる。このため、発生を確認しだい、積極的に枝病斑の直下まで切り戻し、密度低下を図る。

